２０１３年　夏学期　哲学Ⅰ

金４　　石原教官

哲学Ⅰ（石原教官）のシケプリです。

基本はノートとプリントを中心にまとめました。

去年までとは内容が異なっているようです。

なるだけ理解しやすいように噛み砕いて説明することを心がけましたが、日本語が難しかったり、よくわからないところもあると思いますが勘弁してください。

赤文字、青文字はキーワードと思われるところで、緑ラインはそのまま用語説明問題に使えると思われる部分です。

皆さんのお役にたてると幸いです。頑張ってください！！

１　意識

（１）概要

・デカルト以降の考え方で、それ以前は「意識」の問題は意識されてなかった。

・consciousnessには次の２側面がある。

　　　ア）自己（反省性）

　　 イ）気づいている

＊ア）自己（反省性）とは、自分自身を振り返るということ

・ラテン語のconscientiaを語源とする。

　　　　　　　　↓

　　これは「他のものと一緒に」という意味を有していて、

意識とは、

「常に他のものと一緒に作用する」

性質をもつ。

（２）プラトン

○「魂の世話」

：プラトンは滅びる身体は墓場ととらえ、輪廻する魂と区別することができると捉えた。そこで必要となるのが、魂を「悪い状態」（放埒や不正）から遠ざけるための、立法術や司法などの「魂の世話」を行う技術とした。

また、魂を３つの部分にわけ、それらに身体の部位と階級をわりあてた。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 魂の部分 | 身体の部分 | 階級 |
| 理性的部分 | 頭 | 統治階級 |
| 気概的部分 | 胸 | 軍人階級 |
| 欲望的部分 | 下腹部 | 農・工・商人階級 |

（３）アリストテレス

①感覚の感覚

・「見ている」や「聞いている」といった「感覚している」ことを感覚すること。

この感覚は反省的であり、視覚や聴覚といったのとは別の特殊な感覚器官であるのではなく、視覚自体が視覚を感覚している。

②可能態と実現態（デュナミスとエネルゲイア）

・可能態：「やがて現実であるべきモノであること」

・実現態：モノの生成の過程における終点として、「あるモノにその本質が完全

　　　　　に備わっている状態のこと」で、感覚と同時に消滅し、また持続す

　　　　　る。

（例）

家Ａをたてるために材料がある。

この材料は＜家となるべき可能性をもっている＞から、＜家Ａの可能態＞

これを用いてたてられた建物が＜家Ａの実現態＞である。

③共通感覚

・まず、運動・静止・形といったものを共通のものという。

・共通のものは一つの感覚器官では捉えきれない

　　　　　　→共通感覚によって感覚する。

・では共通感覚とは？

「視覚・聴覚などの特別な働き方の一種で、それらが共同で働き、感覚同士を調整する働きや、感覚の反省的把握をしたうえで、共通のものを感じとる感覚」

＊感覚の反省的把握とは、①で述べたようなこと。

④生命の原理

・生命とは、滅びる身体と輪廻する魂がむすびついたモノ。

すなわち、魂と身体は不可分である。（ここがプラトンとの大きな差）

また、上の家Aの例において、家Aを生命、材料を身体として身体を＜生命の可能態＞ととらえられる。

・物体である身体に魂や息を通すことで生命たりうる。

　　　　　　　　　　↓

　　　　　　　これが「心」だとかんがえられてきた。

　　　「心」・・・psyche(ギリシャ)

anima(ラテン)　　　　　いずれも「息」に近い意味の単語

生命の原理とは魂であり、身体と生命を切り離すことはできない。

すべての生命は魂を持っているが、その能力はことなる。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| 魂の能力 | 人間 | 動物 | 植物 |
| 栄養摂取的 | ○ | ○ | ○ |
| 欲求的 | ○ | ○ | × |
| 感覚的 | ○ | ○ | × |
| 場所運動的 | ○ | ○ | × |
| 思考的（理性） | ○ | × | × |

つまり、思考的な能力である理性は人間特有である。

さらに、植物は栄養摂取的な能力しかもたない。

⑤感覚と理性

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 感覚 | 理性 |
| 能力的特質 | 受動的能力（質量を抜きにして、形相を受け取る）＊１ | 思考的能力。何もないところから生じ、自分ひとりでできる自発性の能力 |
| 態 | 可能態の場合もある。（たとえば常に聴覚はある。この時点では可能態、外からの音という働きかけによって初めて働きうる。） | 現実態（常に働いている）と可能態がある＊２　＊３ |

＊１ここでいう質量と形相とは可能態と実現態の関係に似ている。

＊２理性にはふたつある。

一つは人間の理性であり、これは常に働いているわけではなく可能態も含む。

一方で神の理性は、常に自分を鑑賞しているという点で、現実態である。

＊３理性の働きについて、次の二つが挙げられる。

・実践知…何かのやくにたつ。（たとえば工学など）

・理論知…何かのためとかではなく、純粋に考える。この中に観想が含まれる。

⑥観想

・魂の最も理性的な活動であり、人間の実現しうる最高の善。

・何故最高善かというと、理性もつ人間らしさ、すなわち卓越した機能が発揮されるから。

・また、人間が観想するためには、暇が必要であり、市民の代替労働力として、奴隷は正当化される。

・観想は人間のなかの神的な部分が活動して行うので、神的な活動である。

（３）アウグスティヌス

○告白

・前提として神が、完全で善意な存在として、存在する。

・この前提のもとにたつと、神は自分（告白者）（の心の内）をすべて知っているので、告白は何のためか？という疑問が生ずる。

　　　　　←・神に対しての告白は、神が全て知っているから無意味

　　　　　　・他人に対しての告白は、他人は自分の心を知らず、告白の真実

　　　　　　　性が証明出来ず無意味

では何故、告白するのか？その答えは次のように考えられる。

・神に対して、人間は自分のことをよくわかっていないため、自分自身のことを知り、確認し、悔い改めたりするため。

・他人に対して、

（過去に関する告白）自らの弱さを自覚し、告白することで、神が弱者を哀れんだことの証明として自らを位置付け、弱者に勇気を与える。

（現在に関する告白）共に神を信じる人に告白することで、信仰共同体のような形で、信仰・結束を強固にしていく。

＊しかしこれらも告白の真実性が証明できないことに変わりはない。

（４）デカルト

①方法的懐疑

・「堅固でゆるぎない学問」の構築のために、疑いうるものをすべて疑う。

・なかでも次の４つに議論は大別される。

ア）感覚

：外的感覚（感覚対象としての“机”に対する感覚など）は誤りうる。

身体感覚（自分の手の感覚など）はそれが果たして夢なのか覚醒した（起きている状態）なのか区別できない。

よって感覚は全て疑いうる。

イ）数学的真理

：我々を創造した神は数学的真理の明証的認識においても我々を欺きうる。

（簡単に言うと、「３+５＝８」だが計算間違いをして「３+５＝７」とすると、その数学的真理は誤りである。このような計算間違いを常におこさせる悪意の神がいないとも限らないので、数学的真理も疑いうるということ）

ウ）神

：まずデカルトは「神の存在証明」を行うが、それは次の二つの観念による。

・「無限なる実体」…神は無限な実体であるから、有能な人間に由来するとは考えられない。つまり「無限な実体」としての神の観念は神からしか生じえないので、その観念の原因として「神が必然的に存在する」

・「最高に完全で能力ある存在者」…神は最高に完全なものであり、非存在は存在に比べて不完全なので、完全である神にふさわしくない。よって、「神は自らに固有の力によって存在する。」

：次にデカルトは「神の誠実性」を考える

・欺こうとすることは不完全性を示し、「最高に完全で能力ある存在者」としての神にふさわしくないため、「神は欺かない」という「神の誠実性」が帰結する。

・この「神の誠実性」によって、人間が明晰判明に認識するものはすべて真であるという「明証性の規則」が確率される。（神は明晰判明なものを全てつくりうるから）

エ）物質的事物

・物質の本質（明晰判明に洞察される）は、「長さ・広さ・深さ」などの「延長」である。（重さは実験などを通して得られる経験的な知識なので、明晰判明ではない）このことは明証的に洞察されるため、純粋数学の対象である限り存在し続ける。

②「我思う、ゆえに我あり」

方法的懐疑のなかで、感覚や数学的真理などを疑いはじめたデカルトは確実な知を求めた。そこで、「自分が疑っている間は、疑っている自分が存在することは疑い得ない。」という結論に達した。さらに、「見ている」を感じると言ったときの「感じる」のような感覚に伴う反省的な自己知覚（アリストテレスの感覚の感覚に似ている）は疑い得ず、そのことから、「思惟する者」（精神）としての私は疑いえないとした。

③心身二元論

・デカルトは「実体」を次の二つに大別した。

思惟実体（精神）と延長実体（物体）

である。

・また、デカルトは「身体は物体である」と考えたため、身体は延長実体に区分された。身体には二つの能力がある。

あ）移動能力…延長性を含むが、ただ空間的に移動するだけで、何らの知的作用もふくまない。

い）感覚能力…受動的な能力であり、いかなる知性作用も予想せず、自分の意に反してさえおこる。これは自発的な思惟実体とは全く異なる。

・しかしどのように相互作用しているかが謎である。

デカルトは当時機能のわかってなかった「松果腺」が心身の相互作用を担っているとした。

（５）カント

①「純粋理性批判」

・一言で言うと、「経験に先だって理性の認識能力を批判する。」

まず、経験とは、感覚を通じた認識のことで、経験には感覚が必要。

次に、理性とは、感性（受容性、感覚）と悟性（自発性、理性）を含み、

純粋理性とは、「経験的要素によらない理性」のこと。

よって全体では、「経験とは独立した理性が、そもそも認識できる限界を考える」さらには、「感性や悟性の能力について、経験的な知識を使わずに説明する（頭だけで考え、原理的にどうか）」ということ。

・この考えの念頭には、神や世界、魂についての問題がある。例えば「宇宙の果てや始まり」といった問題は人間が考えるが、（現在の）宇宙科学では答がでない。すなわち、「理性が、認識できる限界を越えた」ことになる。

②「私は考える」という表象（表象とは、心の中に浮かぶもの）

・まず具体例を考える。

「黒板」は視覚的表象である。

｛「これが黒板である」と私は考える｝の「私は考える」は「私は考える」という表象

＊この「私は考える」は意識しようと思えば常に意識できるという点で、全ての表象に伴いうる。

・まとめ

「私は考える」という表象の特徴

１、すべての表象の前提となる。

２、純粋統覚である。

　　　→現象を統一して意識する。

例えば、

あ）授業開始時の教卓と授業終了後の教卓が同一であると我々が認識可能なのは、「それは授業開始時の教卓と私は考える」「それは授業終了後の教卓と私は考える」としたとき、「～と私は考える」という同一の主観によりふたつの教卓が統一的に認識されるから。

い）黒板消しを手から離すという行為と、黒板消しが手から落ちるという行為の因果関係を認識可能なのは、「黒板消しを手から離すと私は考える」「黒板消しが手から落ちると私は考える」としたとき、「～私は考える」という同一の主観でふたつの行為が統一的に認識されるから。

＊自我の表象

人間は自分が今知覚している表象が他人の表象とは異なる、「自分の表象」だと理解することができるということ。この点で、人間は動物とは異なり、理性的な対話が可能となる。

③「アプリオリ」とコペルニクス的転回

例で説明する。

「テレビモニターを見る」とは、感覚的には、テレビの前・横・後と３つの異なったものを知覚しているが、しかし実際は「ひとつのテレビモニターを見る」という経験なくして感覚的な経験は不可能である。

つまり、この場合「ひとつの」というのは感覚経験に先だって必要とされる「アプリオリ」なものである。このほかカントは量・質・関係などあるモノが存在者として確実に必要とするものを「カテゴリー」と呼び、「アプリオリ」なものとした。

このことから、「アプリオリ」なカテゴリーに基づく経験があって初めて、具体的諸物は経験可能であり、しかもそれによって初めて諸物はそこにあると言える。これを自然一般にまで広げると、「自然があってそれを経験するのではなく、我々の経験によって自然のあり方が決まる。とういうコペル二クス的転回が生じる。」

④「認識論」

あ）物自体と現象

・物自体…神がつくったもので、我々の認識に依存しない事物そのものであり、我々の「心」を触発して「直感」（表象）を生じさせる。

例えば、ある物自体Aがあるとする。（この段階では、わからない）

それが感性の働きによって我々の感官を触発し、個人のなかに、直観（個

別的表象）を生じさせる。（ここでの直観や表象は何か見たときに、我々の頭・心の中に生じるイメージをさす）その直観を悟性が総合すると概念化の能力を発揮し、最初の物自体Aを「机」という概念のもとで認識する。

・二元（＝世界）論…人間には不可知な神の領域たる物自体と、人間の認識の対象である現象に分ける考え方。＊１何故現象は認識されうるのか？

い）時間・空間

・認識出来る個々の対象・現象は常に時間・空間のなかにある。（逆に、時間的or 空間的に位置を占めてなければ人間は認識できない。）

・時間・空間とは、物そのものの性質ではなく、認識している主観（人間）が何かを認識しようとする際にファクターとして必要だから形成された。すなわち、人間の認識主観の形式にすぎない。

・時間・空間の中にあるものはすべて因果関係のうちにある。（「私は考える」の表象参照）したがって、それらには自然法則が適応可能。

＊１、現象は自然法則に従うため、客観的に認識できるから。

＊ヒュームの批判

カントの因果関係論に異議を唱えたのがヒュームである。

・因果関係の把握（物事には原因があると考えること）は、人間（普通ある現象には原因があると考える）の習慣にすぎず、自然法則のためであるとは考えにくい。

（６）フロイト

①第一期（精神分析以前）

・神経症の症状は当人の意識とは解離した無意識的な力のあらわれであり、この心の無意識的領域と意識的領域の解離は、主体が苦痛な体験から逃れるための防衛手段。→その苦痛な体験を克服、解離を小さくし、神経症治療を試みる。

・幼児期の外傷体験（性的虐待など）がヒステリー（精神症状）の原因となっていると考えたフロイドは、無意識的なこの外傷体験を意識化し、カタルシスというかたちでその感情を放出させることで治療することを考えた。

②第二期（精神分析の古典理論）

・ヒステリー患者の外傷体験は患者の空想であることが多い。

→外傷ではなく無意識的願望こそが神経症の形成とこころの組織化に重要。

・「エディプス・コンプレックス」

：異性の親に対する性的な欲望であるが、抑圧されているため、無意識の欲望となった。これが神経症の症状の原因だと考えた。無意識的表象は、語り（言語表象）を通して知覚（意識）にもたらされる。

③後期理論（第二局所論）

・まず局所論とは、「心」はその全体でまとまって一つの働きをしているのではなく、機能ごとの部品で組み立てられているという説明上のモデル。

・第一局所論は、

意識（一番表面の意識）

前意識（想起しようと努力すれば意識化も可能）

無意識（意識化していない意識、抑圧されたもの）

→しかしこのモデルでは、矛盾が生じる。

そこで、次の第二局所論に転換した。

・第二局所論は、

エス（イド）（本能欲動の領域で多くが無意識）

自我（エスの本能欲動、外的現実からの力、超自我からの圧力を、現実に適応していけるように調整する機能をもつ。無意識的な部分もあり）

超自我（良心の担い手、エディプス・コンプレックスの残遺物として親との関係が内面化したもの。大半が無意識。）にわけて考えた。

・無意識の仮定

無意識を仮定することは、必然である。

根拠①意識の与えるデータには多くの間隙がある。

　　②夢など無意識を前提にしないと説明できない心理的現象が多々ある。

また無意識の仮定によって有益な行為を行うことができ、意識的な仮定の流れを目的にかなうように左右するようになれば、その成果こそ無意識の明白な証拠である。（端的に無意識は心的なものも含め、行動に大きな影響を与える）

（７）ダマシオ

①「心を持つ」ということ

・まず有機体は次の三種類に分けられる。

「行動する有機体」「知的に行動する有機体」「心を持ち知的に行動する」

→・心を持つが、知的に行動しない有機体はいない

　・心とは、行動する有機体において進化プロセスの中で生じた。

・では、有機体が「心を持つ」とはどういうことか？

「イメージになり得る、思考と呼ばれるプロセスのなかで操作しうる、そして将来の予測・計画・次なる計画の選択などを手助けすることで、最終的に行動に影響を及ぼし得る、そんな神経的表象を形成する」ということ。

＊表象の多様性（これはダマシオだけの話ではない）

ア）なんらかの表象を表象する「表象作用」（representation）

イ）表象作用において、（意識の内部に）生じる表象内容（観念）

ウ）表象作用において、（意識の内部に）生じる意識の状態（idea,クオリア）

エ）表象作用における脳内（神経）の状態（神経衰弱）

②イメージ（神経表象）

・行動に影響を与え、操作可能

・例えば、犬のイメージとして「飛びかかってくる」があるとする。

それによって、犬を避ければ、イメージが行動に影響を与えたことになる。

一方、それにも関らず、何もしなければ、そのイメージを操作したことになる。

（８）ハンフリー（理論心理学）

①現象的意識

・現象的意識とは、質的な内容を持った、主観的な体験

・現象的意識は行動に影響を与え、それを持った生き物は違った仕方で環境に適応する。

②「意識の実在論」

・たいていの人にとっては抗いがたい

・感覚が属する現象的な世界のモノすべての存在を個別に確認することはできないので、何らかの想像の産物である可能性を検討すべきである。なぜなら、感覚は不確かであるから。→「意識の実在論」も疑わしい。

２　心の哲学

（１）こうもりであるとはどのようなことか？

＜ネーゲル＞

経験の主観的性格（現象的特性）

・この問いが問うているのは、「こうもりにとって、こうもりであるとはどのようなことか？」であり、こうもり自身が主観的にどのような体験（意識を伴う心的体験）をしているかを考えている。

・このことで次の二つのことを挙げた

ア）あらゆる意識の主観的現象は、単一の視点（一人称的視点）に結びついている。

イ）この意識の性格は、客観的物理学による説明体系では説明できない。

である。

・いまのところ、体験する主体の視点にたってみる（想像力にたよる）以外にはこの経験の主観的性格について考えることは出来ない。この現状は、自己投入や想像に依存しない一種の客観的な現象学（これにより、一部は体験の主観的性格を記述出来るかもしれない）を目標として掲げるに至る。

（２）クオリアとハードプロブレム

・心は二つの概念にハッキリと区別される。現象的概念と心理学的概念である。

心理学的概念：行動に因果関係をつける、あるいは行動を説明づける基盤としての心的概念。問題となるのは、認知体系に果たす役割であり、心は「それが何をするか」で特徴づけられる。しかし、この側面は深遠な形而上学的な謎を提起することはないので、比較的にイージーな問題。

現象的概念：意識的に体験された心的状態としての心の状態に関する概念。すなわち、ネーゲルの経験の主観的性格に似ている。また、心的状態が意識的であるのは、それが体験にもとづいた質を持つ場合であり、そうした現象的な質を「クオリア」と呼ぶ。問題となるのは、心のある状態が意識という質をもつか否かであり、心は「その感じ方」で特徴づけられる。しかし、これはややこしい側面であり、心理学的概念に比べハードな問題。（ハードプロブレム）

例で考える。

犬のイメージとして「飛びかかってくる」を持つとする。

そのイメージは、イメージを持つ人自身にとってどのような感じなのかが現象的概念であり、ハードプロブレムである。

一方、その人が恐怖を抱いていたとして、その恐怖によりその人がどのように行動するかが、心理学的概念である。

（３）心脳同一説

・心（意識）と脳（物理的な中枢神経）のプロセスと同一視する。

すなわち「雲とは水粒である」というように、心的状態と脳状態は説明方法が違うだけで、完全に同一の存在だと考える。

・行動主義（心理学を観察可能な行動を対象とする客観的な科学としてとらえ、意識を対象としない）に対する批判と反省から１９５０年代に展開された。

（４）機能主義（パトナム）

・心と脳を同一視するが、心脳同一説とは違う。後者が物理的に同一視するのに対して、パトナムの機能主義は「機能的に見て、人間の心の機能がたまたま脳によって担われている」として両者を同一視する。

・例えば、計算機を考える。計算機には、重量や集積回路などの物理的な特性をもつが、計算機を計算機たらしめる「計算する」という機能は、物理的特性に依存しない。よって心や脳を心や脳たらしめるのは機能である。

・しかし機能主義の欠点は、クオリア（心を持つ人がどう感じるか）を扱うことは出来ず、心理学的概念（心がどう行動に影響するか）のみを扱う。

（５）表象なき知性（ブルックス）

・主目的は「知性システム（ロボット？）の諸能力を段階的に構築」である。

そのなかで次の二つが考察された。

・それぞれの段階で、環境と知性システムとの相互作用を意識して、現実世界の中におかれて実際に知覚し実際に行為する完全な知性システムが必要。

→一連の自律的なモビール・ロボットを製作。

・上記の知性システムにおいて、表象（人間の神経表象などの内部状態）は考える必要はない。世界をそれ自身のモデルとして用いるほうがよい。

（６）構成論的アプローチ

・着目点は、「人間の知能は身体性、つまり環境との相互作用に依存している」

・端的に、「知性（心）は作ることができて初めて理解できる」ことで、すなわち「環境の中で知的に行動する能力を持ったロボット（自律型ロボット）をつくることで、人間の知能を理解しようとすること」である。

（７）ロボットと心（石黒浩）

・前提「近い将来、人間のような心をもつロボットが社会のなかで活動し、その姿形によらず、我々が社会の一員として認める。」

→「ロボットがもつ人間らしい心」がわかるはず。

・しかし、ロボットは機械とプログラムからしかできていないので、その心はすべて機能（プログラム）に分解される。

・石黒氏の考える心とは、

機能にすべて分解されるので、論理的にはその実体は存在しない。しかし、実感としては心の存在は認められる（クオリアはある？）。

（８）チューリングテスト

別の部屋に設置され、コンピューターが会話に答える。

相手がコンピューターと、

→わかったら、そのコンピューターは人間のフリができていないので、人間と同等の知性（心）をもっていない。

→わからなかったら、そのコンピューターは人間のフリが出来ているので、

人間と同等の知性（心）を持っている。

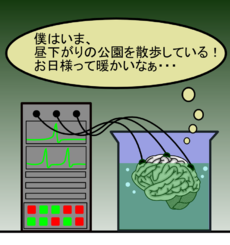
＊心の機能さえあれば、それが生身の人間であろうと、機械であろうと関係ない。

（９）消去主義（チャーチランド）

信念や欲求といった心理的現象を表す言葉は、対応する実存の言葉をいっさい持っておらず、そうした概念はやがて脳の物質的なあり方として、神経科学の言葉だけで説明される日がくる。これにより心をめぐる諸理論は、物理科学一般と強力に統合することが可能である。

（１０）・水槽の中の脳（パトナムにより定式化）

人が体験しているこの世界は、実は水槽（脳を生かしておくための培養液の入った）に浮かんだ脳が見ているバーチャルリアリティなのではないかという仮説。

[](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Barin_in_a_vat_(ja).png)パトナム自身はこの議論を否定している。

・水槽の中の脳（ダマシオ）

ダマシオもまたこの「水槽の中の脳」議論に反証を掲示した。

その論拠は、「身体なしでは脳は心を成立させられない」である。

ダマシオは従来の神経科学の主流であった心をすべて脳に還元する手法に反して、身体それ自体の重要性を説き、むしろ人間の身体があったからこそ、脳が現在のようにまで進化したのであり、それが心を生みだしたと主張。

（１１）ＡＩ論

強いＡＩと弱いＡＩ（中国語の部屋）

強いＡＩ：「適切にプログラムされたコンピューターは心にほかならず、プログラムそれ自体が人間の認知状態の説明である。心にとって生物学的基盤は本質的なものではない。」

弱いＡＩ：「コンピューターは人間の心をシュミレーションするための有用な道具にすぎない」

これの区分を提出したのはサールで、彼自身は弱いＡＩを認めつつ、強いＡＩを否定している。サールは自らの立場を説明するために「中国語の部屋」という思考実験を提案する。「中国語の部屋」と呼ばれる部屋に、英語しか読み書きのできない英国人が閉じ込められている。部屋の外からは中国語の文字の羅列が提示され、どのような文字列に対してどのような文字列の返答を行えばよいのかがすべて記載されている英語の手引書が部屋の中に存在する。英国人はこの手引書通りに返答を行えば「中国語の部屋」の住人としての役割を果たせるし、外から見ればあたかも「中国語の部屋」は中国語を理解しているように認識される。この思考実験からわかるサールの見解は、人工知能が「弱いAI」的能力しか持っていない、つまり本当に心を理解しているのではなく、それをマニュアル通りにシミュレートしているだけということである。つまり、言語哲学的に換言すれば、コンピューターは統語論的な操作しかできないのであり、意味論を兼ね備えていない。どれほど完璧な文法に基づく文をコンピューターが提示できるのだとしても、それはコンピューターにとって何の意味も持ってはいないということなのである。また、生物学的自然主義の立場をとるサールは、そもそも脳という特殊なハードウェアを持たない人工知能はその時点で、脳が存在する場合と同等程度の心を作り出すことができないと考える。しかし逆に、サールによれば、より脳に近い有機的なものを人工的に作り出すことが可能である場合、脳が作り出すそれに類似した心というものを作り出すことは否定できないという。

・反ＡＩ論

ＡＩ論者は、現段階でコンピューターは明らかに身体を持っていないので、それと比較する人間においても、人間が身体をもっているという事実を無視した知的振る舞いにのみ関する理論を立てなければならないが、これは人間を機械から、明確に区別するものが物質的身体であるということを無視しているので意味をなさない。

（１２）拡張された心仮説（クラーク、チャ―マーズ）

extendedとは、心的プロセスが脳・神経的プロセスという体内の枠組みから次第に外界を巻き込んで広がっていく様を示している。これが「拡張された心」の考えである。

たとえば、コンピューターに表示されたある図形があるソケット(溝)にすっぽり収まるかどうかを解く図形問題を考える。図形を心の中で回転させるか、指でボタンを押して図形を回転させて解くか、脳にインプラントを埋め込んでコンピューターを操作して回転させるか、という3つの手法には実は何の違いもない。すなわち我々は、言語や文字、自然物などの外部メディアを利用・加工することで、それらを認知プロセスの補助として用いているのである。つまり、認知プロセスのうちのすべてが脳内で完結する必要はないということだ。

それゆえたとえば、Aは美術館に行きたいと考えたときに脳内で「美術館が53番通りにあること」を思い出して、53番通りへ向かう。一方、記憶障害を持つために常に(普通ならば脳内にあるはずの)情報を参照するためのノートを持ち歩いているBは、同じく美術館に行きたいと考えたときに、ノートを開いて「美術館が53番通りにあること」を発見して、53番通りへ向かう。二者において、「美術館が５3番通りにあること」という信念は同じであり、その信念を参照するための外部メディアが脳神経かノートかだけの違いであり、「拡張された心」の理念に基づけばAとBの認知プロセスは同質である。

・文化的認知（トマセロ）

人間には特有の認知的な適応がある。ある人が別の人を自分と同じように独自の欲求と信念をもつ主体として了解できるような形で、個体（ある人）が同種の個体（他の人）と一体化する能力と傾向にその本質がある。

理学者トマセロによれば、この人間の認知発達を理解するには以下の3つの時間枠に着目する必要がある。

・種としての発達

霊長類の中のヒトという種が、同種の他の個体をどのように理解するようになっていったのかという、系統発生的(生物学の一派としての人類学的)な発達の時間枠。

・外部メディアへの発達

人間が、「種としての発達」のもとで構築してきた独自の他者理解(社会的理解)の手法を、物質的・記号的な人工物などを経由して継承・更新・蓄積していった方法とその推移に関する、歴史的な時間枠。

・個としての発達

人間の子どもが、自分の属する社会の文化をどのように受容し、どのように認知プロセスを発達させていくかといった、発達心理学的な、個体発生的な時間枠。

３　自己と他者、人格の同一性

（１）概要

人格（person←persona…仮面）

人格は二重性であり、次の二つの側面がある

ア）他者との関係によって決まる。これは他者にみせる側面であり、所謂性格。相対的に判断される人格

イ）かけがえのないもの。これは人格の同一性や尊厳に関わる側面で、所謂個性。絶対的に判断される人格

（２）トマス・アクィナスの「人格」論

・「三位一体論」：父なる神（神）と子なる神（キリスト）と聖霊なる神（聖霊）がそれぞれ自立した存在でありながら、本質はひとつである。

・人間には次の二つの完全性が密着に結びついて存在する。

ア）第一の完全性：生まれたときに既に与えられている人格

イ）第二の完全性：他者との関係性を通して発展する人格

出生時にすでに人間であるための基本的な条件として存在論的な全体性を有している人格は、他者との関係性を通して、さらに高次の完全性・全体性へと進んでいくことで、その自律性を自他とのより深い関係性をふくみ込んだより高次の仕方で完成させる。

（３）パーソン論

・端的には「どのような存在が人格（パーソン）であるのか？」という問いに関わる議論で、具体的には、あるものが「人格」（否定したり、壊したりされてはいけない）であるためには「自己意識があること」といった条件が必要であり、それをみたさない存在者の死を引き起こすことは許される。という議論。

・今、「パーソン論」が問題になっているのは、人工妊娠中絶（いつまでなら中絶してよいかなど）や安楽死の正当化などの議論が盛んになっているから。

（４）ロック

・人格とは、「理性をもって反省し、自分自身を自分自身と考えられる、すなわち、異なった時間と空間において、同じ自分自身だと考えられる思考する英知的な存在者」である。

・では、「異なった時間と空間において、同じ自分自身だと考える」とはどういうことか？

→ロックはこれを、「意識によってのみなされる」としている。

　　　　　　　　　　　　　　　過去の自分①（意識）

今の自分（今の意識）

　　　　　　　　　　　　　　　過去の自分②（意識）

上図のように意識が同じであるとすると、異なる時間と空間に存在する「自分」を意識によって同一人格とみなす。

しかし、これは、過去の自分①も過去の自分②も今の自分の意識が思い出せる時に限り、例えば、過去の自分①のときの記憶を失ったとすると、今の自分と過去の自分①の人格の同一性は保たれない。

・また賞罰の権利と正当さは、この人格同一性に基づく。（罰を与えることができるのは、自分の意識をもって行動できる人に限る）

→ずっと心身喪失状態のような人は権利をもたないのか？

＊解離性同一性障害（所謂多重人格）

人物P

|  |
| --- |
| パーソナリティA  記憶として、A1、A２…………. |
| パーソナリティB  記憶として、B１、B2…………. |

すなわち、時間的にまったく分断された二つの人格がある。

Aのときは、Aの意識によって同一視された記憶をもとに人格Aが存在

Bのときは、Bの意識によって同一視された記憶をもとに人格Bが存在

これらふたつの人格はまったく記憶を共有しない。

＊認知症の問題

認知症患者の「事前意志（認知症になる前の意思表示）」について、

事前意志として「認知症になったら安楽死させてほしい」とあったとする。

いざ、認知症になると、本人が幸せそうに見える。

この場合、人格の同一性を、

認めるならば、事前意志に従う。

認めない（ロックの考えに従う）ならば、認知症の前と後は別人で事前意志には従わなくてよい。

（５）カント

・人格とは、「それ自体が、人間の目的であり絶対的な価値。単に手段としては扱ってはならない」

・傾向（欲望）の対象とは、「欲望が無くなれば無価値となる相対的な価値」

・人間は感性界と悟性界（英知界）に属する。

悟性界：理性により支配される世界。傾向性に左右されない（自分がどんな状況にあっても行う）判断を行うという意味の「理性の自由」な世界。

感性界：感覚を通じて与えられる世界。自然法則が支配し、単なる知覚と感覚の感受性とに関して属し、理性の発揮が妨げられもする。

・義務について、

義務とは「自分の傾向性（欲望）に逆らって、理性に従うこと」であり、

つまり、傾向性に逆らうことができない（自然法則により支配される）存在者には義務は生じない。

（６）ハイデガー

・「実存」とは？

実存とは、「（各人にとっての）自己の存在」を意味し、これは生きている限り存在し常に関わっていかなくてはならない。

ハイデガーは自己を二つにわけて考えた。

・非本来的自己：本来的自己を見失い世間にまぎれている。人間の日常的なあり方がこれにあたり、ハイデガーは「世人」と呼んだ。自己も世間の一員にすぎなくなり、自己を失っていて「自己喪失」の状態。根底には死への不安（自分の死の可能性から逃げて安心したい）がある。

・本来的自己：自分が有限であることを確信し、自己の実存を把握した自己。

自己の死の現実に先んじて、おのれの死の可能性に面と向かってあろうとする「先駆的決意性」をもって、自己の死は自己に固有と把握した自己。

すなわち、ハイデガーの中では、

世間（公共性）は実存（本来的自己）と反対である。

（７）レ―ヴェント

・「ペルソナとしての人間個体」

人間個体は役割でしかなく、他者との関係における役割のなかで、人間存在は確定される。→「世界」とはそもそも「共にある世界」を意味していた。

（８）ミード

・社会的自我

人間の自我は孤立したものではなく、他者とのかかわりにおいて生まれ、発達する社会的なものである。「鏡に映った自我」といも言われる。（人間の自我は鏡としての他者の認識や評価を通じて自分を知るから）

・人間の自我の二つの側面

主我（I）：客我（me）をみている「わたし」。人間の主体性を示す。

客我（me）：「一般化された他者」（複数の他者からの期待を組織化し、一般化したもの）から見たと意識する自己像。

（９）リクール

・物語的自己同一性

もとはユダヤ民族が、旧約聖書の受容によって歴史共同体としての自己同一性を保っていたことを意味した。

しかし、ある人物の同一性においてもまた、その人が物語を語ることによって、その自己同一性は保たれる。

４　知識

（１）アリストテレス

・確実な知を手に入れるのが目的

・「三段論法」：論理的推論の型式の一つ。中でも、確実な諸命題を基礎とする必然的三段論法だけが、「学的」である。

大前提、小前提、結論という３個の命題をとりあつかう。

例えば、

大前提：「すべての人間は死すべきものである」

小前提：「ソクラテスは人間である」

結論：「ゆえにソクラテスは死すべきものである」

ここで、大前提は帰納（事実に基づいて、普遍化して行く）に基づく。

帰納は「完全枚挙」（すべての事例を挙げる）の手法をとるとよいが、

ここで問題が・・・・・・・・

すべての人間が死んだことを知っている人間はいない

→これは確実な知ではない。

　　　　　　↓

前提が真である限り成り立つ。

（２）ベーコン

単純枚挙（いくつかの事例から一般命題を導く）のは矛盾する反例によって危険に曝されている。よって単純枚挙ではなく、適当な排斥と排除によって本性を分離して、取り出す。（しかしこの排斥は排除をどうやって行うかはベーコン自身詳細を明らかにしていない）

＊ここで用語の確認

・信念：主観的状態

・知識（信念と真理の中間）：確かめられた（人間が把握している）信念

・真理：主観的状態に依存しない事物の状態

（３）ヒューム（懐疑論）

・「すべて生成するもの（現象や事物）には原因がある」という考え方は知識から生まれるのではなく、観察と経験によって導きだされるが、なぜそう考えるのかが問題である。

・知識はすべて知覚に基づき、その知覚は印象と観念に区別される。印象とは感覚が心にあらわれたときのいきいきとした知覚。観念とはこの印象が記憶や想像のなかに再び現れたもの。

・「知識」の考察

「因果関係」（合理論によるとすべての事物は因果関係の内にある）を分析してみる。二つの事柄が因果関係にあるとは、原因と結果が時間・空間的に接近していて、原因が結果に時間的に先立ち、必然的結合（原因がおこれば必ず結果が起こるということ）が両者のなかに存在する場合である。

・どのように因果推論するようになるの？

２種類の対象（例えば炎と熱）が接近して何度も繰り返されると、心の癖のようなものによって、炎を原因、熱を結果として、炎があると熱が生じると法則的に常に再現されると思い込む。

しかし、これはこれまでがたまたまそうだったにすぎず（知識ではなく信念）次もまたそうなるとは言えない。

→「帰納の問題」に発展

帰納の問題：帰納によって個別的命題から普遍的命題を導きだすことは不可能。例えば「このカラスは黒い」（単称命題）からと言って、「すべてのカラスは黒い」（全称命題）を言うことは不可能。（完全枚挙＝しらみつぶしなら可能）

・しかし、ヒュームはすべての知識を否定している訳ではない

例えば論理や数学は知識だとしている。それは、こうした知識はそこにでてくる観念にのみ依存するので、その正しさが確実なものであるから。

例えば三角形の観念から「三角の和は１８０°」という関係を見出すが、これは観念が同じである限り変化しない。

（４）論理実証主義

・有意味な文／命題（真偽をいえる）は以下の二つの特性をもつのに限る

ア）分析的あるいは自己矛盾的(正しいあるいは間違っていると論理的に)いえる

イ）経験的にテスト可能

このふたつが、経験論的基準と呼ばれる。このもとでは

「神が存在する」という命題は

論理的に正しさを言えないかつ、経験的にテストできないので、有意味な文ではない。

（５）ポパー（反証主義）

・論理実証主義の反論して

・経験的（帰納的）に理論をテストするという論理実証主義にたいして、「理論は経験的（帰納的）に実証できない」としている。

・ヒュームの帰納の問題を論拠として、科学において検証（ある命題を経験から真であると確定する）ことは不可能で、験証（ある命題を経験的に支持する）にすぎない。

・「反証可能性」

では、どのような体系が科学的といえるのか？

それは、経験的テストの手段によってネガティブな意味で選別される（反証される）科学体系である。

例えば、「すべてのカラスは黒い」という全称命題はたった一つの「あるカラスは白かった」という反例で否定できる。よってこの理論体系はその理論が偽であるということが確定すると同時に科学的である。

・理論は帰納によってではなく看想（天才的なひらめき）によってのみ得られる。

（６）クーン（パラダイム論）

・パラダイムとは「一定の期間、科学者の共同体にモデルとなる問題や解法を提供する一般的に認められた科学的業績」である。

・クーンは科学の歴史を知識の累積のよる連続的進歩の過程としてではなく、パラダイムの交代による断続的転換の過程として捉えなおした。（ここでいうパラダイムの交代をクーンは「科学革命」と呼んだ。

・パラダイム変換の具体例としてコペルニクス説の出現を考える。

プトレマイオスの体系からコペルニクスの説へと天文学のモデルが変更されたことはパラダイムの変更である。しかしここでは「見方」を変えたということが重要であり、その体系／説の正しさは必ずしも重要ではない。実際プトレマイオスの体系はコペルニクスの説に比べて成績（正しさ）がまったく低いわけではなく、理論が複雑であるからコペルニクスの説に移行したに過ぎなかった。

つまり、両者はまったく違った見方をしているので、共通の評価基準が存在しない。よって両者の優劣は判断できず、これを「通訳不可能性」と呼んだ。

・またクーンは、逸脱事例（理論でうまく説明できないもの：理論にとっては反例）の積み重ねによって、パラダイム転換は生じ、一つの逸脱事例で理論が直ちに否定されるわけではないとしている。

→これは一つに反例で（全称）命題を否定出来るとしたポパーの反証主義の反論となっている。

（７）ファイアーアーベント（アナーキズム）

・うまく行けばなんでもよく、科学に際して哲学的なことを考えていてもしょうがない。

（８）ラカトシュ

・ポパー派であるが、クーンの理論を取り入れて科学哲学を構築した。

・その実験結果によって瞬時に理論の正否を決めるような単一の実験、すなわち、決定実験（リサーチプログラム）は存在しない。（クーンの逸脱事例に関する考え方を利用した）

（９）自然化された認識論

・科学哲学とは、「科学とは何か？」「科学とはどのように正当化されるのか？」などといった問いである。

・これらの問にたいして、伝統的な認識論者は科学的知識や科学的方法を頼りにするわけにはいかず、主義的プログラムによってのみ解答しようとしてきた。

・しかし、そもそもこれらの問いは科学に先だってあるのではなく、科学の発見したことや科学的知識に基づいて生じる。

→よって認識論（科学知識は正当なのか？など）は科学内部の問いなのだ。

すなわち、科学的な手続きによって解決されるべき（哲学者は科学の中で科学者とともに解決する）であり、人間の物理的存在にも着目するべきである。

例えば、認識を考える際に、人間の認知の構造を認知心理学や脳科学によって理解するといった側面から学才的に考えるということ。

（１０）新しい認識論（社会化された認識論）

・短期的な意思決定ではある程度合理的に判断するが、ときには偏見や社会的圧力に支配される科学者たちが、長期的に見れば科学の目的（真理）を達成しているように見える。

→どのように組織づけられどのような交渉過程を実現している科学者集団なら、長期的に科学の目的にかなった選択をできるのかが、新しい認識論の課題。

５　合理性

（１）手続き主義と合理主義

・手続き主義：本人の欲求・信念と関係ある欲求をもつべきである。

・合理主義：本人の欲求・信念とは無関係に、ある欲求をもつべきである。

具体例で説明する。

○ある人が物理学者になりたいとする。

それには良い成績をとって、理学部物質学科に進学する必要がある。

それゆえ勉強する必要がある。

ここで「物理学者になりたい」というのは欲求、その欲求から逆算して導きだされる「理学部物質学科に進学する」「良い成績をとる」「勉強する必要がある」は信念である。こうした欲求や信念を達成するためには、「勉強する」という欲求をもつハズである。その「勉強する」という欲求をもたないというのは非合理である。

これが、手続き主義。手続き主義は個々人の条件にそって決められる。

○「勉強する」という欲求を持つべきだと社会的に決められたとする。

すると、ある人が「将来的にまったく勉強をしない職業につきたい」という欲求を持って、そこから導かれる信念に従って「勉強する」という欲求をもたずに行動すると、それは非合理である。

これが、合理主義。

＊限定的合理性（サイモン）

日常において、人は効用（満足）を得るのに最適な手段を常に選ぶことはできず、どこかの時点で適応的な判断をくだすが、その合理性を表す言葉。

「効用（満足）を最大にするわけではないが、最大にする最良の手段を探索そるのにはコストがかかるので、その探索を最小にすることを目的に、現在とることが可能な(手持ちの)手段を選択することは非合理ではない。」

＊最小合理性（チャ―ニアク）（ノートに書いてないので範囲じゃないかも）

・前提：哲学の世界では合理的な人間は常に合理的だという理想的な合理性を主張してきた。（例えばどんな状況でも合理的な人間はa=b, a=cならばa=cと判断するはずだ）

・しかし、人間には記憶や計算量といった限界が存在するので、必ずしも合理的に振舞えるとは限らないのではないか？

→完全なる合理性を想定することは、非現実的だという批判

・合理性とはオールオアナッシングではなく、この程度の判断ができれば「合理的である」といえる「最小合理性」が存在するハズだという概念。

（２）社会的合理性（主にベック、日本では藤垣）

・中心概念：「科学的合理性」は「社会的合理性」とは一致しない

それぞれについて考えてみる。

・科学的合理性…科学者集団の妥当性境界によって保証される合理性。

つまり科学者が自分たちの前提とする暗黙の価値（何が国民にうけいれられるか）を前提に、リソースを利用して、厳格な手続きを経て、時間やコストをかけて決定する際に用いる合理性のこと。

・社会的合理性…「ある公共の妥当性境界を、社会的場面での判断の基準として採用する」という判断を担保する意思決定のしくみ。

つまり社会的な問題を解決する際に必要となる合理性のこと。（ノートから引用。しかしこれがすべて言い尽くす説明かはわからない）

ここで例を用いて説明する。（説明くさくなるが勘弁してほしい）

そもそもベックは「リスク社会」という本の中でこれらを説明している。

ここでいう「危険」＝「リスク」とは近代化によって生み出された科学と産業の副産物としての環境破壊である。しかしこのリスクは初めは目に見えない。

ベックは原子炉の問題を例にあげている。

原子炉を危険と判断するには、放射性物質の測定などによる危険を発する因果関係といった科学的認識と、そのような危険性に脅かされた生活は望まないという規範的価値判断（上でいう公共の妥当性境界）が必要である。

ここで「科学的合理性」とは、数値化できる放射線量などによりもたらされる危険しか考えていない。しかし、「社会的合理性」（主体は周囲の住民など）では、大災害をもたらし得る核エネルギーの潜在能力そのものを恐れ、核兵器の拡散・人的なミス・事故の影響の持続性・技術的決定の不可逆性などを危険とみなしている。

このように「科学的合理性」と「社会的合理性」は一致していない。

（３）合理性と正義論（ロールズ＆ハ―サニー）

・原初状態（両者が前提としている）

自分の社会的地位や経済的状況について情報をまったく持たないという仮想状態（無知のヴェール）

○ロールズ

・「マクシミン原理」の選択が最も合理的な選択

・「マクシミン原理」：無知のヴェールな状態では

①機会の平等

②制度上の不平等の是正（最も不遇な人々の期待便益の最大化）

の二つに従うという原理（端的には最悪の条件において期待できる効用が一番良い選択肢を選ぶ）

この原理に従う選択が最も合理的である。

＊この二条件を満たすときのみ、社会的・経済的不平等は編成されてもよい。

○ハ―サニー

・平均的な期待効用の最大化が合理的な選択

つまりロールズのように有害事象がおこる確率がどんなに低くても、それが起こることを前提にして意思決定を行うマクシミン原理ではなく、普通の状態を想定して一番期待できる効用は最大となるような選択が最も合理的である。

６　正常と異常

○フーコー

（１）「精神疾患とパーソナリティー」

・精神錯乱（疎外）の捉え方

一般的には、まず“異常”があって、そこから病理的な行動が引き起こされ、それをもって精神錯乱（疎外）が作りだされると認識される。

一方フーコーは、精神錯乱（としての疎外）が原初的な状態としてあり、そこから病理的な行動が発見され、最後に異常なものが登場すると捉えた。

・精神疾患

フーコーは精神疾患を「ブルジョワ社会の矛盾の産物」として捉え、逆に精神疾患の患者が、「ブルジョワ社会には病を可能にする葛藤があり、この社会は現実の人間にふさわしくない」ことを示しているとした。すなわち、精神疾患の出発点は周囲環境の矛盾にあり、よってこれを治癒するためには、精神分析などによってではなく、患者が環境との間で新しい関係を築くことを目指す治療にするべきである。

→反精神医学に発展

反精神医学：精神疾患の患者自身には一次的な欠落はなく、精神的な病をつくりだしている欠陥は社会の矛盾のなかにある。

（２）「狂気の歴史」

①中世ルネッサンス期

狂気と理性は明確には区別されておらず、不思議な神秘とかが問題になっていたイマージュの中でぼんやりとしていた。

②１６５７（１７世紀中ごろ）～１８世紀末（古典主義時代）

フランスの＜一般施療院＞の創設に始まる流れ。狂人と呼ばれる人々を施設に収容した「大監禁」の時代である。また狂人は犯罪者として扱われていた。

③１８世紀末～１９世紀　（１８世紀後半に精神医学が発達した）

狂人の（鎖からの）解法。狂気の扱いが「犯罪」から「病」へと変化した。

しかし、（フーコーによる）これは決して改善ではなく、いまだ狂人が完全な罪なき人であるのは、「絶対的な非自由」（病人というレッテル、疎外）においてでしかない。

→現代人と狂人は交流していない。一方には理性の人が存在し、狂気に向かって医師を派遣し、病気という抽象的な普遍性を通してしか関係をみとめず、他方には狂気の人が存在し、秩序や、身体的で精神的な拘束、集団による無名の圧力や順応性が要求する理性を介してのみ理性の人と交流を持たない。

こうして両者の間に共通の言語は存在せず、独白的な関係に陥る。

＊ピネル「鎖からの解放」

当時の精神患者の病院は、大抵が閉鎖病棟であり、手に鎖をかけられている患者もいるような惨状であった。一方時代は１８世紀末のフランスで、革命期の啓蒙主義で狂人は犯罪者ではなく治療対象だという考えが広まっていた。

そんななかピネルは閉鎖病棟の改善やホスピスの開放病棟化などの画期的な改革をすすめていいた。（しかしここでいう「鎖からの解放」は身体的なものであって、フーコーのいうように病気として扱われる限り、精神的なものからは解放されない）

④現代の流れ

・例えば“同性愛”：最初は犯罪（リドミー法）として扱われ最悪死刑の対象にもなっていたが、２０世紀には精神障害の一つとして考えられ、最近では多様性として考えられている。

・医療化（medicalization）：マイノリティや問題行動など従来医療の対象でなかったものを医療の対象にすること。

例えば、「人前に出るのが苦手」というのを「社会不安障害」と捉える。

フーコー的には病気とみなすことは本人の自由を徹底的に束縛することなので、医療化は望まれるものではない。一方で、病気として見直すことで、その治療法が正式な治療法として認められるようになるメリットもある。

（３）権力論（試験にでるのか謎。でないと言っていたと思うがノートに書いてあったのはまとめる）

・パノプティコン

左図のなかで、中心の赤丸が監視塔であり、周囲の青い丸が収容室を示す。

この施設の特徴は、中央の監視塔から全ての収容室は見ることができるが、逆にすべての収容室からは中央の監視塔は見られないという一方的な監視が行われていることである。

これ自体は英のジェレミ・ベンサムが考案した。

フーコーはこれを規律訓練型権力のモデルとして説明する。

この施設では収容室にいる一人ひとりが常に監視されているかもしれないと考えることで、監守の目を内在化させ、自己監視のもと自らを律していく。

この「他者の視線を内面化させ、自己監視・自己反省によって規範を内在化させる」ような権力のことを規律訓練型権力という。

例えば初等教育において、学級のなかで「係」をきめる。

すると生徒はその「係」に応じて、自主的に規範に従って判断し行動する。

・刑罰の変化

「身体罰」から「精神に対する罰へ」

以前は鞭打ちなどの身体罰が行われ、しかもその可視性が重視され見せしめなどがおこなわれてきた。しかし、刑罰の過酷さは徐々に緩和し刑罰制度の対象が身体から精神へとかわった。死刑廃止の論争もこの一つとして位置づけられる。

７　公共性

（１）アレント

・私的領域と公的領域を区別する

・アレントの考え方は古代ギリシャのポリスに基づいている。

ギリシャにおいて「家」とは、生命の要求を満たすために必要にかられて生じた「私的」なものである。ここでいう「私的」とは政治的な活動と談話という最も人間的な活動力（政治への参加）が奪われていることを意味する。そして、この「私的」な家という閉ざされた空間で行われる活動を「政治」と対比して「経済」とした。

一方で、ポリスは、「公的」＝政治的空間であり、その意味で「自由の領域」である。すなわち、生命の必然から解放され自由に政治に参加でき、自由に議論できる領域なのである。

このように以前は、「公的」な領域と「私的」な領域、「政治」と「経済」はハッキリと区別されていた。

・ところが近代になってその状態は変化する。

近代になって、私的でも公的でもない「社会」がたちあらわれた。（ここでアレントは「社会」を「単一の超人間的な家族の複製へと経済的に組織された複数の家族の集合体」と定義している。）この「社会」においてそれまでは私的事柄だった「経済」が全共同体の関心事となり、「公的」領域に侵入した。

ここで「公的」な領域と「私的」な領域、「政治」と「経済」の明確な区別は失われた。

（２）ハーバーマス

・「公共性」を定義

公共性は以下の二つの機能を持つ。

ア）国家権力に対する批判的機能

イ）公開の議論などを経た公論が法や政策の唯一正当な源泉（構成的機能）

こうした公共性の＜規範的＞理解にハーバーマスは決定的影響を与えた。

・「公共性」の歴史的経緯

１８世紀「文芸的公共性」という形で、カフェやサロンの場で広がった。このときは、身分や地位を離れて自由に理性的な議論を行う参加資格の＜開放性＞というほどの意味であるが、以前の公的権威と結びついたものとは違い市民

間に形成される自律的領域を意味した。

フランス革命の前後から新聞や雑誌などの公衆メディアの発達（これらのおかげで広い層に情報が行き渡り、公開性が実現された）を背景として、政治的意味を強く帯びるようになった。（上に書いた構成的機能を備えるに至った）

＊しかし同時に、新聞は実現したい方向性に向けて情報を流すことで「アジェンダ」を設定、すなわち世論操作することも可能であり、これを操作的公共性という。また、ハイデガーの「世人」のように日常的に人間は世間にまぎれ自己喪失にあるので、（同調圧力などによる）言説の無責任性が生じ、公共の議論の合理性は疑わしいものになっている。

８　正義論

・現代正義論では正義と権利と善の関係を問題にする

（１）功利主義（主にベンサム）

功利主義は以下の３つの側面をもっている。

・効用の最大化を実現する行為が正しい行為。（最大化原理）

・行為の正しさに関して、目的論（目的に照らして行為の正しさを判断）や帰結主義（行為の帰結を重視する）を採用している。

＊目的論・帰結主義と対立するのは動機主義（カントはこれに基づいて、行為の正しさは動機によって判断され、人間はするべき行為を行うべきだという義務論を展開した）

・個人の善の総和に還元されない社会的な善は存在しないという意味での「個人主義」（利己主義ではない）

この部分（最大多数の最大幸福）において、功利主義は二つに分けられる。

・総和主義：社会構成員全員の効用の総量を最大化する。

・平均効用主義：社会構成員一人当たりの平均的な効用を最大化する。

次に「最大多数の最大幸福」における幸福をどう捉えるかで二つに分けられる。

・快楽説：快を感じている時点の本人による、その感情に対する選好の充足（プリントそのまま）。つまり、快（欲求の対象となる感情）の大小はその感情がいかに強く望まれるかによって比較される。この望ましさというのは、そのような感情を人がどのくらい選好するか（他よりもあるものを好むか）によって決まり、この選好が充足され（望ましい感情/快が充足される）ことが幸福である。しかし、問題点があり、効用の測定（どれほど満足しているかの測定）が難しく、また個人間の比較も難しい。

例えば、

AとBという二人がいて、

Aがリンゴとバナナから得る効用はどちらが多いかはAの感想などから判断できる（この場合も数値的に効用を測定している訳ではない）が、AとBのリンゴから得る効用を比較することは難しい。

・選好充足説：快などという感情を持ち出すのではなく、単純に利害関係者の選好（どちらを/何を、より好んで選ぶかということ）を充足させる行為が正しいということ。しかし、この問題点は選好強度を考慮しない選好順序のみにより社会選択を行おうとすると循環に陥り決定できなくなる。

例えば、投票のパラドックス

投票者１　A＞B＞C

投票者２　B＞C＞A

投票者３　C＞A＞B

とすると、その三人のなかでの選好順位は循環してしまう。

＊効用の比較

・ヘア（選好功利主義）

他者の選好について十分な知識が与えられれば（細かくそれぞれの選好における表情を見るなどして）、個人内の効用の比較を応用して、個人間の効用も比較できる。

・ハ―サニー

期待効用仮説のもとに効用関数を利用する。

そもそも期待効用とは、複数の状態i(i=1,2,……ｎ)があり、それぞれの状態iが起こる確率がΑ*i*で与えられているという環境の下で得られる効用の期待値を表している。

期待効用ＥＵ（Ａ）はｐ×Ｕ（Ｘ１）+（１－ｐ）×Ｕ（Ｘ２）で表す。

ここで例えば給与に関して考える。ある人は４０％（ｐ）の確率で３０万もらい、６０％（１－ｐ）の確率で５０万もらうとすると、その期待効用は、ＥＵ（Ａ）＝４０×Ｕ（３０）+６０×Ｕ（５０）

と表される。ここでＵ（Ｘｎ）はＸｎを選択することによる効用を示す。

これをシグマ記号で表せるがそれはプリントｐ４６を参考にしてください。（シグマ記号の書き方がわかりませんでした泣）

すなわち、これによって個人の期待効用は数値化可能であり、個人内の選好を一つの基準で序列化でき、個人間の比較はそれぞれの選好序列の基準間の変換効率の問題として定式化可能である。

そしてその上で、平均効用（合理性のところで既出）を最大化する社会が良い社会である。

（２）ロールズ（合理性のとこで既出）

ロールズの正義論には以下の４つの特徴があり、順を追って説明する。

①正義概念の捉え直し

・正義は社会契約という考え方が表現する公正であり、諸制度・実践の一つの徳性である（唯一のではない）

・正義の二原理を考えた

ア）リベラリズム：自由に対して対等な権利を保持する。しかし、他人の自由を犯すような自由は認められていない。

イ）社会的・経済的不平等は以下の二条件を満たすように編成されなければならない。

a 最も不遇な人々の便益を最大化（格差原理）

b 機会均等

②功利主義への批判

ロールズが「正義論」をだした意図は、功利主義に代わる（直観主義ではなく）体系的な倫理学理論（正義論）の提出を目指した。

これにたいしての功利主義がわからの反応は、

・一般的幸福は個人の効用関数の合計からなる社会的効用関数によって表すことができる

・限界効用逓減（効用はある程度まで多くなると、逆に下がって行く）とあいまって、所得の分配の平等を支持する論拠を与えられる

→直観ではない。

③カント義務論と社会契約説の接合

本来は、絶対的に個人の人格を尊重するカント義務論とどんなものであっても本人同士の取り決めによる社会契約説は表面上の相性は良くないが、個人の権利を考えることで両者を統合した。

④ゲーム理論や社会選択論、厚生経済学などを踏まえて議論を展開

＊カント（なぜここで取り上げたかわからない）

理性の使用には二つ側面がある。

・公的使用：自分の社会的地位を離れて理性を使用

→これで初めて啓蒙が可能

・私的使用：自分の社会的地位のために理性を使用

（３）ロールズへの批判

①セン

・ロールズの「社会基本財」の分配原理に対する批判

・ロールズは格差原理の中で、その不平等の度合いを基本財（経済的な財）にのみ注目している。しかしこれでは身体障害者のハンディキャップに適正な配慮が出来ない。（さらに、普遍的原理を求めるあまり人間の多様性に対する配慮も足らず、「物神崇拝」に陥っている。）

→「基本的潜在能力」（capability）の重視

人がその達成に成功する様々な「機能充足」と、ひとがこれらの機能充足を達成する「潜在能力」に関心を集中する。（身体障害者などの弱者により配慮する）

②リバタニアリズム（自由至上主義）

他者の権利を侵害しない限り、各個人の利益を最大限尊重すべき。

最も不遇な状況を考えての、再配分を否定した。

中心はノージック（後述）

③サンデル（後述）

ロールズのリベラリズムを特定の「善」を前提しない「正義」として否定した。

（４）権利論

・ドゥウォーキン

功利主義批判、法実証主義（実定法のみを法学の対象とする）批判を展開して、権利の優位を主張。

ロールズの正義の二原理における「自由」の優先を批判し、正義の二原理は「平等と尊重を受ける権利」から生じる具体的帰結であり、その妥当性は契約に基礎をおかないとした。

・ノージック

①自然状態考察

国家は必要か？という問いに答えるため

ロック：自然状態でひとは、行動を律し財産と身体を処分する自由がある。

　　　　　　　　　　　　　　　↓（これをうけて）

（自然状態で）自由や権利の個人的な執行は報復の連鎖となり、個人の権力執行の力を欠きうる。

→複数の相互保護協会が誕生

→支配的な保護協会に発展

＊支配的保護協会は

ア）ある人々に自分の権利の実行を許す

イ）領土内のすべての個人を保護するわけではない

という点で、国家とは異なる。

→支配的保護協会の領域内から超最小国家が誕生

＊超最小国家：支配的保護協会の一部の地域でその領域内のすべての個人を保護する地域があらわれて誕生。

→最小国家

②権原理論

ア）権利の正義の原理（ロックの所有権の考え方で、「自分の身体を使って得たものには正当な権利を有する」）に従って保有物を獲得する者は、その保有物に対する権利を持つ。

イ）ある保有物に対する権原をもつ者から移転の正義の原理（権利をもっているひとの意志で譲渡した）に従ってその保有物を得る者は、その保有物に対する権原を持つ。

ウ）上記以外では、所有権は発生しない。

③歴史原理と結果状態原理

歴史原理：身体の自己所有そのものの論理構造

論理の手続が正当ならば、その結果もまた正当である。（＝権原理論）

結果状態原理：配分的正義の論理構造

「各人から～に従って」（生産過程）と「各人に～に従って」（配分過程）を切り離したとしても、結果状態が正当かどうかに着眼する。

＊再配分はその保有物の権利を持っている人の選択（意志）にのみよるので、この意に反した再配分は不当である

→再配分は国家の仕事ではない。

（国家はその権限が限定された最小国家にとどまるべきである）

④ユートピア

最小国家は人間を、侵されず一定のやり方で使われないものとして、個人としての諸権利を持ち尊敬を伴う人格として扱う。そのことで、人間は自分の生を選び、自分の目的と自分自身について抱く観念とを実現することを可能にする。

（６）共同体主義

・自由主義および権利論にたいし、共同体の伝統や価値を重視する立場

①サンデル

・right（権利・自由）はgood（善）に先行しない

カントやロールズは正義に関して「正は善に優先する」として、

ア）個人の権利は、全体の福利によっても凌駕されない

イ）われわれの権利を基底する正義の原理は、何らかの善き生（good life）や道徳的もしくは宗教的な「包括的」概念に依存しない。

→「負荷なき自己」（完全に自由な主体とは、理性によってのみ動く主体）

サンデルはこの「負荷なき主体」を否定した。

↓

・正義は善に相対的

ア）正義は共同体が認める価値に依存している。

イ）正義は目的の内在的な価値や善に依存している。

→善は共同体の中からのみ生じる（共同体主義）

・Free speechについて

リベラリズムはFree speechを無制限に認め、ロールズは他者の自由を侵害しない範囲で認めている。

しかし、この両者の視点にたつと、ネオナチの行進とMartin Luther Kingの行進を同様のものとみなすが、そうではない。

善の概念に基づいて考えれば、これらは同じではない。

・「無知のヴェール」について

無知のヴェールのもとでの契約は、契約者同士を最も不遇な立場という同じ立場においた上で結ばれるが、本来契約は、立場が違う者によって結ばれることで拘束力が生まれ、合意内容は理性によって発見(考えられる)ものではない。

②マッキンタイア

情熱主義（道徳判断は個人の好みに過ぎない）や自由主義（カントなど）を否定して、アリストテレスに立ち返り、礼節と知的・道徳的生活を内部で支えられる地域的形態の共同体を建設するべきである。

過去問

２０１２年　夏学期

Ａ事項説明（５×１２）以下の事項・概念について説明せよ。

１、「私は考える、ゆえに私はある」（デカルト）

２、人格同一性（ロック）

３、純粋統覚（根源的統覚）（カント）

４、無意識（フロイト）

５、志向性（フッサール／サール）

６、水槽の中の脳

７、機能主義

８、「身体性認知」と「拡張された心」仮説

９、遠近法的世界（ニーチェ）

１０、理解の基本的形式と高次の形式（ディルタイ）

１１、ヘテロ現象学（デネット）

１２、「精神のモジュール形式」と「心の理論」

Ｂ論述問題（２０×２）

１、「チューリングテスト」および「強いＡＩ」と「弱いＡＩ」などに触れながら、コンピュータやロボットが「心」を持ちうるか否かについて論ぜよ。

２、心（および意識）と脳とはどのような関係にあるのだろうか。哲学者たちの考えを紹介した上で、自分の考えを述べよ。

２０１３年　夏学期

Ａ事項説明（５点×８）以下の事項・概念について説明せよ。

１、第二局所論

２、消去主義

３、チューリングテスト

４、反証主義

５、パラダイム（クーン）

６、合理性に関する「手続き主義」

７、「狂気の歴史」（フーコー）

８、公共性の批判的機能

Ｂ論述問題（２０点×３）以下の関係について論ぜよ。

１、「身体」と「心」

２、「人格」と「記憶」

３、「正義」と「幸福」